

フラナリー・オコナーの「善人はなかなかいない」における 曖昧な正義と皮肉な恩寵

米 山 雅 浩

Flannery O'Connor の “A Good Man Is Hard to Find”¹⁾ の最終的な解釈の曖昧性は、作者自身が批評家相手に解釈の方向性を明言せずにはおけなかったほどであり、その曖昧性は登場人物の基本的な性格分析さえ著しく不安定なものにしている。the grandmother を最終的に善人と取るか否かで解釈が分かれているのは言うに及ばないが、The Misfit に遭遇する前の the grandmother の知力や人間性は否定的に捉えられるのが通例であった。すなわち、家族旅行の行き先をフロリダではなく東テネシーに変更させるために、孫が惨劇に巻き込まれる様子を息子の Bailey に吹き込み、息子が嫌うのを承知で、愛猫 “Pitty Sing”²⁾ を自家用車に持ち込み自分の足下に隠し持ち、息子や義理の娘の粗末な服装に無頓着な一方、自分は万一事故に遭ってもその遺体は一日でレディーと分かるような服装で飾り、路上の黒人の子供を指して、“pickaninny” (119) の蔑称を使い、レディーを自称する割には、うたた寝すると大きな鼾をかき、その度に自分の鼾で目を覚まし、寄り道をするために孫たちの賛同が必要と思えば、遠い過去の不確かな記憶に多大な脚色を交えた作り話をし、自分のせいで車が横転事故を起こしたのに、息子の怒りを逸らすために怪我をした振りをし、事故の目撃者の同情を買うためかどうか定かではないが、一回転したところを二回転と誇張して言い、あげくにその目撃者の正体が脱獄中の凶悪犯 The Misfit であると口に出したため、車だけを奪うつもりでいた The Misfit に一家皆殺しの口実を与えてしまう³⁾。まさに枚挙に暇がないとはこのことであろう。

だが、the grandmother の美点も見逃すべきではない。車中で孫たちに故郷の景色の美しさと愛郷心を教え、黒人の子供が貧しい事情に理解を示し、ずっと赤子を抱いている義理の娘に代わって赤子をあやし、孫たちの喧嘩を仲裁し、車窓からゴミを捨てないように孫たちを諭し、漫画に飽きた孫たちを滑稽な法螺話で楽しませようとし、陰気な話に終始するドライブ・インの主人「陽気なでぶ」こと Red Sammy Butts を慰め励まし⁴⁾、彼の夫人に対して生意気で非礼な返事をした孫娘をその母親に代わってたしなめる。これらは the grandmother にとってごく自然な行為のようである。そして何よりも、The Misfit 一味の拳銃に対抗する術もなく唯々諸々と一家の死を甘受したように見える息子の Bailey とは違い、the grandmother はこれまでもそうであったように話術で相手を説得しようと試みる。The Misfit がキリストによる死者蘇生に強いジレンマに陥っていると見るや、これまで一顧だにしなかったはずのキリストの福音を持ち出してくる。死のメタファーと現実の死に覆いつくされたこの作品にあって、the grandmother の飽くなき生への執着は作中人物最大の美点であり、William Faulkner が “Red Leaves” で描いた、死去した主人の供養として殉死させられる宿命から逃れられないことを承知しながら、宿命に捕えられる瞬間まで

死力を尽くして逃れる逃亡奴隷が示した人間の崇高さに通じるものがある。結局、The Misfitに出会ってしまう前の本来のthe grandmotherは善人か否か。この古い問題のどちらか一方に正答があるとは言えない。誤読を誘うような表題ではあるが、一方的な善人はいないと答えるより他ないのである。

The Misfit以外の人物描写にも、読者による固定的な性格判断を許さない側面がある。語り手にオウムのシャツを着せられたBaileyに与えられた役割は、無意味な発言を思慮なく繰り返すことと、the grandmotherの運転手を忠実に務めることである。また、彼は子供の躰にも実母の要望にも無関心を貫く態度であった。だがBaileyは車が転落しそれを見に来た男たちに拳銃を向けられても、事態を収拾しようとする意思を見せた。もとより打つ手はなく、息子のJohn Wesleyとともに射殺されに森の中に連れて行かれる時は、保護を求めるような息子の手を掴み父性を示した。その絶望するより他ない状況にあってBaileyは振り返ると大声で、「すぐにもどるからね、母さん。待っててくれよ」と叫び、the grandmotherに最後の情愛を示した。Baileyの妻はキャベツやウサギに譬えられるとおり、鈍重で何を考えているのか、何かを考えているのかさえ分からない人物と想定されている。横転事故で誰よりも深手を負ったのも、この名前のない母親である。作者はこの人物に常識的な一面を与えている。他人の屋敷に侵入し秘宝を探し当てようと逸るJohn Wesley⁵⁾を諫め、事故後も冷静さを保ち、そのうち通りかかる車もあるからと、家族を慰めるのもこの母親だった。一方、母親は評価困難な行動も見せている。Red Sammyの店のジュークボックスに10セント硬貨を入れテネシーワルツをかけたのは何故か。Wyatt Pruntyが読むように⁶⁾、フロリダではなく親戚のいるテネシーに行きたかったのに叶わなかったthe grandmotherに対する意地悪か、それとも慰めなのか。孫娘のJune Starは口癖の「100万ドルもらっても……しない」が示すと通りの、兄のJohn Wesleyに劣らず粗暴で強欲な子供であるが、死を前にしてもThe Misfitの手下相手に普段の減らず口を貫き勇気と自尊心を示した。

一面的な人物造形に陥らないのは、O'Connorの鋭敏な観察眼の賜物である。これに皮肉で突き放したようなユーモア感覚が加わり、この作品はWilliam Faulknerの“A Rose for Emily”にも通じる⁷⁾、独特なグロテスクな滑稽味を帯びる。事故死を想定してレディーとして死後恥ずかしくない服装を選んだとするthe grandmotherの独り言は、単純な伏線ではあるが、早くも作品の冒頭で死のイメージを軽やかに伝える巧妙な仕掛けである。家族が死を迎える場所の最寄りの町Toombsboroは、不吉かつ間延びした音で家族の最悪の結末をどこかユーモラスに暗示する。事故現場に近づくThe Misfit一味の黒い車は霊柩車に譬えられ、露骨なまでに死のイメージを駆り立てる。そして、一味に目をつけられた一家の後方には、森が口をあけて今にも一家を飲み込みそうに広がるイメージが、どこかのどこかに語られる。“Behind them the line of woods gaped like a dark open mouth” (127). 執拗に死のメタファーを繰り返しながらも、南部的なとぼけたのどこさを滲ませる。これらが結末の陰惨さを幾分か救っているとも言えるが、むしろ積極的に死を相対化していると評することもできる。何よりも、すぐ傍の森には家族5人の遺体が横たわるのに、妙な神学談義を繰り広げる老婆と殺人鬼のそれぞれの立場を忘れたかのような会話は、この惨劇が当然持つはずの残酷さを無化するほどの驚くべき効果を発揮している。

では改めて、the grandmotherは何者かと問えば、作者自身も語っているように、南北戦争前の栄華を伝え聞いたおそらくは最後の世代に属する、大叔母や祖母と呼ばれた人たちの一事例なのである。

I've talked to a number of teachers who use this story in class and who tell their students that the Grandmother is evil One of these teachers told me that ... particularly his Southern students resisted this interpretation ..., and he didn't understand why. I had to tell him that they resisted it because they all had grandmothers or great-aunts just like her at home, and they knew, from personal experience, that the old lady lacked comprehension, but that she had a good heart. The Southerner is usually tolerant of those weaknesses that proceed from innocence.⁸⁾

必ずしも善でも悪でもなく、もはやレディーと呼べる階層ではなく、他者に同情や共感を寄せることはできるが、それを実行しない。物語の前半部のthe grandmotherはそのような失われた南部の温情、格式、無垢、言わば南部的「善」をアイロニカルに戯画化された人物として描かれている。The Misfit登場以降のthe grandmotherはその曖昧さをさらに深める。作品の外に立つはずの作者からの過剰な介入もあり、作者の意図とその正確な反映を信じるか否かで、批評家のthe grandmotherに対する評価も最終的に決まっていく。

曖昧さは淘汰を免れ文学史を生き延びてきた小説にとってむしろ不可欠のものであり、当然O'Connorのこの短編小説においても瑕疵と見なされるものではない。O'Connor自身は曖昧さが自作に意図せぬ多様な解釈を許すのを嫌うだろうが、一般に文学批評において作者の意図に敬意を払うことはない。作者はthe grandmotherに唐突に訪れた信仰心の目覚めを、命乞いのための口から出まかせと批判する批評家を批判し、そのとき不意に神の恩寵がthe grandmotherに訪れたと主張する。

It is true that the old lady is a hypocritical old soul; her wits are no match for the Misfit's, nor is her capacity for grace equal to his; yet I think the unprejudiced reader will feel that the Grandmother has a special kind of triumph in this story which instinctively we do not allow to someone altogether bad. (*Mystery and Manners*, 111)

There is a moment of grace in most of the stories, or a moment where it is offered, and is usually rejected. Like when the Grandmother recognizes the Misfit as one of her own children and reaches out to touch him. It's the moment of grace for her anyway—a silly old woman—but it leads him to shoot her. This moment of grace excites the devil to frenzy.⁹⁾

作家の権威は絶大で、intentional fallacyを避けるはずの批評家もこの件には沈黙し、以後、“A Good Man Is Hard to Find”の批評史において、the grandmotherは家族を皆殺しにした相手の宗

教心に付け込みイエスの名をみだりに唱える不信心者ではなくなる。だがO'Connorの論法に馴染みの薄い読者は当然ながら、the grandmotherに神の恩寵が与えられるのは不合理と感じる。その日のthe grandmotherはそれに相応しい言動を示すことはなく、そのような人生でもなかったと誰もが疑うところである。そもそもthe grandmotherが“Jesus. Jesus”と唱えると冒瀆に聞こえるとの語りは、彼女の平素の不信心を暴露したものだ。“Finally she found herself saying, ‘Jesus. Jesus,’ meaning, Jesus will help you, but the way she was saying it, it sounded as if she might be cursing” (131). だが、O'Connorから見れば神の恩寵は人間の考える理性や合理性を超越している。作者はthe grandmotherの奇跡的な変化が読者に与える違和感や当惑を軽減させる枠組みを一応は用意している。“Ain’t a cloud in the sky,” he [The Misfit] remarked, looking up at it. “Don’t see no sun but don’t see no cloud neither” (127). “There was not a cloud in the sky nor any sun” (131). 雲ひとつない青空で太陽も出ていない。合理的説明のつかない、言わば人知を超えた環境でthe grandmotherの身に起こること、それが神の恩寵の伝達役へと変身することなのだと作者は言いたいのであろう。

人物造形の曖昧さは、Herman Melvilleが*The Confidence-Man: His Masquerade* (1857)で展開した、人間とは心理も行動も多面的で一貫性を欠いた両義的な存在であるとする人間観¹⁰⁾を継承するものである。芋虫はその変態である蝶とは別の個体ではない。ならば利己的で信心の欠片も見せなかったthe grandmotherが、俄かに神の恩寵の伝達者へと変身するのも不可能ではない。少なくとも、O'Connorがそう宣言して以来、大多数の批評家はその違和感を封印している。

しかし、O'Connorの介入を批判する例外的な批評家もいないではない。Stanley Renner, Kathleen G. Ochshorn, Stephen C. Bandyらである。彼らはD. H. Lawrenceの至言 “Trust the art, not the artist.” を引き合いに、O'Connorが書簡や講演を手段にテキスト外部から読者に一方向の解釈を強いることに抗議している。

“A Good Man Is Hard to Find,” a story that has proved particularly troublesome because O'Connor’s statements about her intention in its violent climax enjoins an interpretation that does not appear to be supported by the logic of its own content. I refer to O'Connor’s representation that at the moment of the grandmother’s death at the hands of an escaped killer, when she sees him as one of her own children, she enjoys a sudden accession to divine grace, a “special kind of triumph” (*Mystery and Manners*, 111) that seems beyond the capacity of the character as we know her in the story.¹¹⁾

Generally O'Connor chalked up all the misreading and confusion to the spiritual shortcomings of the modern reader: “Today’s audience is one in which religious feeling has become, if not atrophied, at least vaporous and sentimental” (*Mystery and Manners*, 161) Grace is the uneasy cloak O'Connor designed to cover and justify the violence in the story. The grace is a guise, a rationale that is not brought off.¹²⁾

... there are surely many others who can only be appalled by a calculating opportunist who is capable of embracing her family's murderer, to save her skin. ... [T]hrough the centuries the Church has entertained a variety of views regarding the mechanics of grace. To bring the complex machinery of this theological abstraction into the alien world of the Grandmother and the Misfit is more than inappropriate. It is inapplicable Are we to regard her as the unwitting agent of divine grace whose selfish intentions are somehow transfigured into a blessing? Such seems to have been O'Connor's opinion.¹³⁾

New Criticism全盛期でも、作家の書簡集や講演集、インタビュー集などが作品の解釈に広く利用されてきたことは事実である。また、主流の宗教や宗派とは異なる信仰を持つ作家の宗教性が問われることも珍しくはなかった。だが、O'Connorの率直すぎる発言は、作者の意図が判明している場合はそれに従って読むべきか、作者は意図したとおりに作品を書けるのか、読む行為の主体は読者ではないのか、といった旧聞に属する問題が、まだ解決済みではなかったことを思い起こさせる。“A Good Man Is Hard to Find”を読んだKatherine Anne Porterは、O'Connorの外観と作風の余りの乖離に衝撃を受けたと言うが¹⁴⁾、公刊した小説の解釈の自由を読者に渡さない、その断固たる姿勢に新たな衝撃を受けることだろう。

曖昧性は当然ながら主人公のThe Misfitにも及ぶ。この人物の曖昧さは、彼がmisfit (= off-balance) であることに由来する。彼の発言と行動はそれぞれが首尾一貫していて、そこに曖昧な点はない。彼と世間との関係が彼の目には曖昧 (= off-balance) に映るのである。the grandmotherとの応答から窺い知る彼の確固たる哲学と、配下に下した命令の冷酷さとの余りに大きなずれは解釈の不統一を招き、表題の“A Good Man”とはThe Misfitであるとの極端な逆説を唱える批評家は決して珍しくない。そのThe Misfitは実際に登場する前に、2回その名が言及される。“‘Here this fellow that calls himself The Misfit is loose from the Federal Pen and headed toward Florida and you read here what it says he did to these people’” (117). “‘Did you read about that criminal, The Misfit, that’s escaped?’” (122). 発言者はともにthe grandmotherで、明らかにされているのは、自称The Misfitはフロリダに逃亡中の凶悪犯らしいこと、そしてこの奇妙に思弁的な渾名はどうやら公認されているらしいことのみである。また、引用の前後から、the grandmother以外にThe Misfitの記事を気に留める者は誰もいないことがわかる。簡単な言及も2回繰り返せば、見え透いた伏線となる。一家が旅の途中でThe Misfitと遭遇するのは、小説の当然の約束事である。作者は南部ゴシック小説の伝統を巧みに利用し、読者を作品に引き込んでいる。

物語は皮肉で南部的ユーモア漂う展開となっていく。The Misfitに遭うことを誰よりも恐れていたthe grandmotherであったが、自らの浅薄なたくらみの数々が、文学的必然的作用によって、読者が予期し期待していた展開へと結実する。一家の乗った車は何か月も誰も通らないような側道で事故を起こす。読者の期待どおり、the grandmotherが密かに連れ込んだ猫がBaileyの肩に

跳び乗り、それを予期しなかった Bailey は不意を突かれてハンドル操作を誤り、車は堤防の下に転落、一回転して止まったのである。そこへ奇跡的に一台の車が通りかかった。その車は転落の一部始終を目撃していたのである。もちろんそれは The Misfit 一行の乗る黒い「霊柩車」のような車だった。O'Connor はこの露骨な隠喩と伏線を巧みに操り、残酷さとユーモアを融合させる。何か月も通行のない人里離れた側道の堤防の下からさらに奥まった森の中に遺棄された一家の遺体は、いつか発見されるのだろうか。ユーモラスな設定を散りばめたあとだけに、その悲惨な状況が際立つ。

その The Misfit は受けた厳罰に値する重罪は犯していないと思っている。読者に真相は不明であるが、彼には虚偽を語っている意識は微塵もないらしい。“I call myself The Misfit,” ... because I can't make what all I done wrong fit what all I gone through in punishment” (131). The Misfit は父親殺しを否定するが、他の犯罪にも手を染めてないとは言っていない。服役は妥当なのか、刑期は妥当なのか、読者に知る術はない。The Misfit 自身も自らを善人とは認めないが、最悪の人間でもないと言う。

“I just know you're a good man,” she said desperately. “You're not a bit common!” “Nome, I ain't a good man,” The Misfit said after a second as if he had considered her statement carefully, “but I ain't the worst in the world neither.” (128)

the grandmother に同様の世辞を言われた Red Sammy は喜びを隠せないが、The Misfit はこの発言を慎重に吟味したうえで、彼にとっての真実から外れている部分を訂正する。今後の The Misfit の長広舌には犯罪歴の披瀝は含まれない。だが、“No pleasure but meanness” (132) と述べているように、何らかの悪事を働いていたから自らを善人とは認めないのであろうし、長じて連邦刑務所に収監されるに至った理由は、父親殺害を認定されただけではあるまい。その妥当性は読者には判断できず、作者はそこに効果を狙って故意に曖昧さを残していると見てよいだろう。同様に The Misfit が感化院に収容された理由も曖昧なままにされている。“I never was a bad boy that I remember of,” The Misfit said in an almost dreamy voice, “but somewhere along the line I done something wrong and go sent to the penitentiary” (130).

The Misfit は子供時代から misfit だった。“Daddy said, 'it's some that can live their life out without asking about it and it's others has to know why it is, and this boy [The Misfit] is one of the latters'” (128-29). 青年になってからも彼の言わば自己探求は続く。ゴスペル・シンガー、陸軍・海軍、葬儀屋、鉄道工夫、農夫と職を転々とし、その間、凄絶な人間模様を見聞してきた。“I been ... in a tornado, seen a man burnt alive ...” “I even seen a woman flogged” (129-30). 彼の misfit は解決せず、人間の惨状に立ち会ってきた経験は、彼を冷静沈着に人を殺められる人間に変えた。

The Misfit は自分 misfit の根本原因はイエスにあると疑っている。本当にイエスがラザロを死から甦らせたとしたら、世のすべてが均衡を失ってしまった (off-balance) のはそれが原因と考えている。

“Jesus was the only One that ever raised the dead,” The Misfit continued, “and He shouldn’t have done it. He thown everything off balance. If He did what He said, then it’s nothing for you to do but thow away everything and follow Him, and if He didn’t, then it’s nothing for you to do but enjoy the few minutes you got left the best way you can (132)

合理主義者の The Misfit は、自分がその場でその場面を目撃していなかったことだけを理由に、イエスの奇跡を信じることができない。したがって、彼の論理では、彼はキリスト教信仰を持っていないことになる。反対に、みだりにイエスの名を唱え他人に祈りを強要する the grandmother は、キリスト教信仰を持っているはずであり、したがって、ラザロの蘇生を信じているはずである。ならば、一家全員を殺害しても、the grandmother の信仰が揺るぎないものであれば、イエスに祈り家族が甦ることを一点の疑念なく信じるはずである。The Misfit は皮肉を込めて the grandmother の信仰を試しているわけではない。彼の硬直した形式論理は¹⁵⁾、彼にこのような思考と行動を促すのである。だが、the grandmother の信仰はもとより確信のないものであり、家族が次々と目の前から消えていく現実を前に、一層危うくなる。“‘Maybe He didn’t raise the dead,’ the old lady mumbled, not knowing what she was saying ...” (132).

ここで The Misfit は一歩踏み込んだ発言をする。それは、信仰を持ちたいのに自らの論理性がそれを許さないことに懊悩しているようにも聞こえる。

“I wasn’t there so I can’t say He didn’t,” The Misfit said. “I wisht I had of been there,” he said, hitting the ground with his fist. “It ain’t right I wasn’t there because if I had of been there I would of known. Listen lady,” he said in a high voice, “if I had of been there I would of known and I wouldn’t be like I am now.” (132)

作者 O’Connor の言う、神の恩寵が舞い降りてきたのはこの瞬間だった。選ばれたのは、The Misfitではなく、the grandmother であった。

... the grandmother’s head cleared for an instant. She saw the man’s face twisted close to her own as if he were going to cry and she murmured, “Why you’re one of my babies. You’re one of my own children!” She reached out and touched him on the shoulder. (132)

だが、作者は皮肉な結末を用意した。“The Misfit sprang back as if a snake had bitten him and shot her three times through the chest” (132). 少なくとも表面的には救いのない結末を用意するのが、モダニズムの作法であり、O’Connor もこの系譜の後尾に連なる作家である。神の恩寵を持ち出さなくても、これ以上望めないほど秀逸なクライマックスである。the grandmother の一瞬の閃きとは、恩寵の訪れではなく、新たな命乞いの妙案が浮かんだことを意味している。イエスの奇跡を信じていないことを自ら暴いてしまったあとでは、慈愛に溢れる母性の演出に縋るほかない。

殺害直前まで Bailey が着用していたオウムのシャツを着た The Misfit を見ての発言であるから、象徴的な「息子の交換」が行われたと見ることもできる。いつも Bailey におねだりするように、the grandmother は The Misfit の肩に腕を伸ばしたが、その腕の動きは The Misfit にはヘビの「誘惑」に思えた。そして3回撃った。他の家族は一発ずつしか撃たれていない。作者は正確に数えられるような書き方をしている。この3という数字は The Misfit の嫌悪感の強さを示すが、「恩寵」派は The Misfit も父と子と聖霊に縋っていると解釈したいようである。

この母性の偽装を真実の母性の発露と受け取り、神の恩寵の急な訪れと見るのが定説となっているが、やはり直後のヘビに噛まれる譬えは無視できない。一方、the grandmother の死顔は平和な微笑を湛えている。作者の主張する恩寵の訪れを見るならこの箇所を措いてない。the grandmother をヘビに譬えたその直後に、満足の行く死を迎えた表情を湛えた the grandmother の死顔を描く。ここに至ってなお作者は新たな曖昧さを追加する。しかし結末部の The Misfit の評言は the grandmother の全否定である。自分のように何度でも撃ち殺してくれる人がいなかったから、この人は善い人になれなかったと評しているに等しい発言である。the grandmother は神の恩寵を The Misfit に取次ぐ役割を得たと作者は別所で述べるが、恩寵は彼に届かなかったのだろうか。絶対者からの恩寵を辞退するなど可能なのだろうか。O'Connor はそんな The Misfit を “a spoiled prophet” (*The Habit of Being* 465) と形容するが、それを例証する描写は作中にはなく、どんな定義で「預言者」の語を用いているのかを、作品の外側であっても明らかにしていない。

Bailey 一家を次々と殺害する命令を下す The Misfit に嗜虐的な喜びは微塵も見られない。“It's no real pleasure in life” (133) との持論を証明する態度のようでもある。一方、殺害にあたって苦痛も躊躇も見せない。逃亡中の凶悪犯にとって目撃者を始末するのは合理的であり、論理的思考に基づき行動する The Misfit にとって、一家殺害は論理的帰結であるが、無感情な態度は如何に説明できようか。キリストを信じるなら死者はラザロと同様の待遇を期待できるはずである。The Misfit の論理はそう考えるだろう。自分自身は信仰を確信できないが、Bailey 一家が揺るぎない信仰を持っているならば死から甦るだろう。死から甦るか否かは自分の問題ではなく、キリストとキリストを信じる者の問題である。The Misfit が殺害命令を一貫して無感情に下していたのには、こうした背景があると思われる。作者自身もこの作品がグロテスクであるとの評価に反論し、読者は死体の数ではなく the grandmother に下りた神の恩寵に目を向けるべきと主張している。

This story has been called grotesque, but I prefer to call it literal. A good story is literal And in this story you should be on the look out for such things as the action of grace in the Grandmother's soul, and not for the dead bodies. (Mystery and Manners, 113)

自身の手は汚さずに乳児を含む5人を続々と銃殺する The Misfit に読者は共感すべきではない。それでも自我と世間との不調和を調停できずに懊悩する半生をおくり、その苦悩を隠さず吐露する姿には、ある種の同情を禁じ得ない。自分の罪と罰との間の理不尽な断絶を語っても、the

grandmotherは自身も信じていない祈りを押し付けるばかりで、一向に本当の理解や共感を示さない。それに反して読者のThe Misfitに対する理解は進んでいく。巧妙な語りである。

神は全能であり、神の意志は測り知ることができない。義人ヨブでさえ7人の息子と3人の娘を神に奪われた。神が恩寵の伝達役にthe grandmotherを選び、The Misfitを受け手に選んだからには、ふたりの言動は恩寵に値しないと読者や批評家が憤っても無駄である。作者はそう述べているに等しいが、それでは小説の独立性はどうなるだろうか。この作品の舞台が異教の地でも同様の解釈しかないのか。作者は死体の数を重視しないが、近代人は失われた命を惜しまずにはいられない。ヨブは神に試され7人の息子と3人の娘を失い、のちに祝福され同数の息子と娘をもうけた。O'Connorはそれでよしとするのだろうか。同数の子供たちが生まれたからと言って、ひとたび失われた命は永遠に戻らない。数は代償にはならない。“A Good Man Is Hard to Find”は近代小説である。ヨブ記ではない。そして近代小説につきものの、逆説、皮肉、曖昧さに満ちている。最大の皮肉は、the grandmotherは我知らず一家を滅亡へと誘ったが、最初から旅先をthe grandmotherの言うとおりに、The Misfitの向かうフロリダを避けて、親戚のいる東テネシーにしていれば誰も殺されずに済んだことである。O'Connorは望まないが、この作品は南部ゴシック・ユーモアの傑作と評するべきであろう。

注

- 1) Flannery O'Connor, “A Good Man Is Hard to Find” in *The Complete Stories* (1946; New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971). 以後、引用はこの版に基づく。なお、本稿の表題の一部に、横山貞子氏訳による「善人はなかなかいない」のタイトルをそのまま借用している。横山貞子訳『フラナリー・オコナー全短篇（上）』、ちくま文庫、2009年。また、日本語で引用したものは、横山氏の訳語を用いた。
- 2) 一家滅亡の引き金を引いた、Poeの黒猫を彷彿させるこの猫の名は、pretty thingの幼児語である。作者の一癖あるユーモア感覚がこのような場面であっさりと表現されている。この猫は最後にもう一度登場する。飼い主一家が惨殺されたあと何事もなかったかのようにThe Misfitの足下にじゃれつくのである。作者がPoeの“The Black Cat”の結末を意識したことは疑いない。
- 3) The Misfitは“but it would have been better for all of you, lady, if you hadn't of reckernized me” (1133) と応じているが、その後の会話や独白に虚偽を疑わせる点はないことから、この直前までは一家殺害の意思はなかったと推測できる。この家族の悲惨な運命はthe grandmotherがすべて準備したものだと言わざるを得ない。また、the grandmotherの大失態に我を忘れて罵ったBaileyのその汚い言葉に、家族はもとよりThe Misfitまでもが動揺した件は、早くもこの逃亡犯の一筋縄では行かない複雑な性格を物語っている。
- 4) the grandmotherはRed Sammyを「善人」と呼び、彼を感動させるが、Red Sammyが妻に示す態度は感心できるものではない。妻が客と僅かでも歓談するのを好まず、強い口調で厨房へ追いやるのである。また、彼とthe grandmotherの親密な交友はふたりが同じ社会階層に属すからとの指摘がある。“... the grandmother is paired with Red Sammy Butts, personification of the red-necked South, with whom she enjoys an immediate and deep-rooted rapport based on their common vernacular and identical system of values.” Stanley Renner, “Secular Meaning in ‘A Good Man Is Hard to Find,’” *College Literature* 9, no. 2 (1982). 本稿ではGale Literature Resource Center データベースから引用。

- 5) 父親を足蹴にしてまで要求を押し通そうとするこの強欲で粗暴な子供の名は、Methodismの創始者に由来する。作者の底意にあるものが悪意でなければ何であろうか。
- 6) Wyatt Prunty, "The Figure of Vacancy" in Wyatt Prunty ed., *Sewanee Writers on Writing* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 2000). 本稿ではGale Literature Resource Centerデータベースから引用。
- 7) 筆者はFaulknerの影響を感じるが、O'Connorと長年の知己であったTed R. Spiveyは、O'ConnorはFaulknerやEudora Weltyの文学的影響を受けないように腐心していたと証言している。"Seeing O'Connor through the eyes of the deconstructionists, using the concepts of intertextuality and logocentrism, will help readers understand how much she sought to avoid the influence of writers like Faulkner and Welty, both of whom she admired." Ted R. Spivey, "Flannery O'Connor, The New Criticism, and Deconstruction," *Southern Review* 23, no. 2 (April 1987). 本稿ではGale Literature Resource Centerデータベースから引用。なお、Spiveyの同論文によれば、前出Poeの影響はO'Connor自身も認めているようである。"She several times mentioned to me how much Poe meant to her Poe's mingling of the humorous and the horrible undoubtedly found its way into stories like 'A Good Man Is Hard to Find.'"
- 8) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners* (1957; New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970), p. 110. 以後、引用はこの版に基づく。
- 9) Flannery O'Connor, *Letters of Flannery O'Connor: The Habit of Being* (1979; New York: Farrar, Straus and Giroux, 1988), p. 373. 以後、引用はこの版に基づく。
- 10) この人間観は小説全体に溢れているが、一例として以下の引用がそれを要約するだろう。"We are but clay, sir, potter's clay, as the good book says, clay, feeble, and too-yielding clay (20)." "But don't be too sure what I am. You call me *man*, ... [I]n man's form, ... [y]ou can conclude nothing absolute from the human form ... (225-26)." "Life is a pic-nic *en costume*; one must take a part, assume a character, stand ready in a sensible way to play a fool (133)." Herman Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade* (1857; Evanston & Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1984). 引用はこの版に基づき、ページを括弧内に示した。
- 11) Stephen C. Bandy, "'One Of My Babies': The Misfit and the Grandmother," *Studies in Short Fiction* 33, no. 1 (Winter 1996). 本稿ではGale Literature Resource Centerデータベースから引用。
- 12) Kathleen G. Ochshorn, "A Cloak of Grace: Contradiction in 'A Good Man Is Hard to Find,'" *Studies in Short Fiction* 18: 1 (Spring 1990). 本稿ではGale Literature Resource Centerデータベースから引用。
- 13) Stanley Renner, "Secular Meaning in 'A Good Man Is Hard to Find,'" *College Literature* 9, no. 2 (1982). 本稿ではGale Literature Resource Centerデータベースから引用。
- 14) Kathleen G. Ochshorn, "A Cloak of Grace: Contradiction in 'A Good Man Is Hard to Find'"
- 15) 彼の極端な形式論理が端的に表現される場面は、量刑に不審を抱く一方で、「公式書類」が自分の犯罪や収監について記載している以上は、自分は犯罪者であり、収監は誤りではないと認める点に見られる。"Maybe they put you in by mistake," the old lady said vaguely. 'Nome,' he said. 'It wasn't no mistake. They had the papers on me'" (130). "[T]hey could prove I had committed one [a crime] because they had the papers on me" (131).